

令和 2 年 4 月 24 日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02043

研究課題名(和文) ジェンダーの視点による翻訳文体と翻訳規範に関する実証的研究

研究課題名(英文) Empirical Research on Translational Style and Norms from a Gender Perspective

研究代表者

古川 弘子 (Furukawa, Hiroko)

東北学院大学・文学部・准教授

研究者番号：70634939

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は(1) 翻訳テキストと非翻訳テキスト(日本語で書かれたテキスト)の女ことばの使用を文末詞使用に焦点を当てて比較することと、(2) 翻訳テキストにみられる女らしい言葉の背景にある翻訳者の規範と読者の翻訳テキストへの期待を探ることである。その結果、翻訳テキストの女性文末詞の使用率が高いこと、女ことばが翻訳規範として機能していることが分かった。研究成果は国際・国内学会(3件・2件)と公開講義で口頭発表され、論文は国際・国内学術誌(1本・2本)と書籍の1章が発表された(全て査読有)。共編書The Palgrave Handbook of Literary Translationも出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本課題では、児童文学と現代小説の両ジャンルともに翻訳テキストは非翻訳テキストよりも女性登場人物の会話文に使われる女性文末詞の割合が高いことが分かった。翻訳者へのインタビューでは翻訳者や出版に関わる人々が女らしい言葉づかいという規範に影響を受けていることが、読者受容研究では女ことばの使用が翻訳テキストの特徴として捉えられていることが示された。翻訳・非翻訳テキストの言語使用をジェンダーの視点から比較分析することと、ジェンダー・イデオロギーと翻訳者や読者との関連性を研究することは新たな試みであり、非常に有意義であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This research project sought (1) to compare the language use of female characters in Japanese translations of English novels and novels originally written in Japanese and (2) to investigate translators' norms and readers' expectation for translated texts. The study revealed that translations into Japanese use more feminine language than novels originally written in Japanese and that translators and readers were likely to be influenced by the norms of feminine language. The outcomes were presented at three international conferences, two domestic conferences and a public lecture. These presentations were developed into articles, which were published in one international and two domestic journals, as well as a book chapter, all peer-reviewed. In addition, The Palgrave Handbook of Literary Translation was published from Palgrave Macmillan.

研究分野：翻訳学

キーワード：文学翻訳 文体 読者受容 規範 ジェンダー・イデオロギー 女ことば 女性文末詞 児童文学

1. 研究開始当初の背景

本課題の代表研究者は、翻訳テキストで女性登場人物の会話文に女ことばが過剰に使われることを定量・定性分析によって実証的に示してきた。そして、この傾向は「女は女らしい言葉を使うべきである」というジェンダー・イデオロギーの表出であり、そのイデオロギーを広め、維持する役割を果たしているとして主張してきた。

- (1) しかしながら、翻訳テキストと非翻訳テキスト（日本語で書かれたテキスト）で言語使用がどのように違うのか、また相似しているのかを検証するために、女ことばの使用に焦点を当てて比較分析した研究はほとんどなく、実証研究が求められていた。
- (2) 翻訳者が翻訳テキストで女性登場人物の会話文に女らしい言葉を使わせる背景にはどのような翻訳規範があるのかを探る必要があった。
- (3) 読者は翻訳テキストにみられる言葉づかい、いわゆる翻訳文体と言われるものに対してどのような期待を抱いているのかを探ることも求められていた。

以上 3 つの理由から、ジェンダーの視点から翻訳テキストにみられる文体と翻訳規範についての実証研究を行い、翻訳テキストが社会システムにおいてどのような役割を果たしているのかを考察することが重要であると考えた。

2. 研究の目的

上に示した問題意識から、本課題の目的は以下の 2 つであった。

- (1) 翻訳テキストと非翻訳テキストの女性登場人物の言語使用はどのように違うのか、または相似するのかを定量・定性分析によって実証的に示す。
- (2) 翻訳テキストにみられる女らしい言葉の背景には、翻訳者の持つ規範の影響があるかどうかを複数の翻訳者にインタビューを行って探る。さらに、読者が翻訳文体にどのような期待を持っているのか、あるいは持っていないのかをアンケートを通して考察する。

(1) は、翻訳テキストがジェンダー・イデオロギーの表象物としてどのような役割を果たしているのかを具体的に探るために、必要不可欠であった。また(2)のように、ジェンダーの視点から翻訳規範や翻訳テキストへの期待をインタビューや読者受容研究によって明らかにするのは、日本の通訳翻訳研究では非常に新しい試みであり、研究を行う意義があると考えた。

3. 研究の方法

- (1) 翻訳テキストと非翻訳テキストの比較分析では、(a) 児童文学と (b) 現代小説の 2 つのジャンルを選び、次の研究手法で分析を行った。定量的手法では女性登場人物の会話文をすべて取り出し、その会話文に使われる文末詞をオカモトとサトウの分類表(Okamoto and Sato, 1992, pp. 480-482)に従って strongly feminine, moderately feminine, neutral, moderately masculine, strongly masculine の 5 段階に分類した上で結果を分析した。定性的手法ではテキストの一部を抽出し、翻訳者による言葉づかいの差を詳細に分析する方法を用いた。児童文学を分析対象に選んだ理由は、子供の成長過程で言語規範が影響を与えられられるからである。また、現代小説は翻訳・非翻訳ともに現代女性の言葉づかいを再現しやすいと予想されるために分析対象とした。これらのテキストは定量分析で実証する価値があると考えた。
- (2) 翻訳者の規範と読者の期待についての研究では、まず複数の翻訳者や編集者へのインタビューを行い、翻訳者がどのような規範を持ち、その規範が翻訳行為にどう影響を与えるのかについて探った。さらに、大学生に翻訳テキストと非翻訳テキストを読んでもらい、それらの文体に対するアンケートを行うことで、読者が翻訳テキストに対してどのような期待を抱いているのかを調べた。

(出典) Okamoto, S. & Sato, S. (1992). 'Less feminine speech among young Japanese females'. In K. Hall., et al. (ed.), *Locating power: Proceedings of the second Berkeley women and language conference, April 4 and 5, 1992, Vol.1*. Berkeley and Calif: Berkeley Women and Language Group: 478-488.

4. 研究成果

2016 (平成 28) 年度

この年度は、主に翻訳テキストと非翻訳テキストの文末詞使用の分析を児童文学の女性登場人物に焦点を当てて行った。ここでは、まず『ハリー・ポッターシリーズ』(全 11 巻、J.K.ローリング、松岡 佑子訳、1999-2008)、『ナルニア国ものがたり』(全 7 巻、C.S.ルイス著、瀬田貞二訳、1985-1986)、『魔女の宅急便』(全 6 巻、角野栄子著、1985-2009) など計 30 冊程度を定性分析したのち、『ハリー・ポッターシリーズ』と『魔女の宅急便』の女性主人公の会話文に使用される文末詞の定量分析を行った。その結果、非翻訳テキスト(『魔女の宅急便』)よりも翻訳テキスト(『ハリー・ポッターシリーズ』)の女性主人公の方が女性文末詞の使用率が高いことが分かった。

この研究成果は、国際学会 PALA (Poetics and Linguistics Association) Annual Conference (University of Cagliari, Italy) と国内学会・日本通訳翻訳学会第 17 回会年次大会(同志社大学)で口頭発表された。発表タイトルはそれぞれ「Translational and Non-translational Style in Japanese Children's Literature」「キキとハーマイオニーの女ことば 翻訳と非翻訳の児童文学における文体比較」である。その後執筆した論文「Kiki's and Hermione's Femininity: Non-translations and Translations of Children's Literature in Japan」は、国内学術誌「翻訳研究への招待」(*Invitation to Interpreting and Translation Studies*) (Vol. 17, pp. 20-34, 査読有) に掲載された。

また、国際学会 The Fifth Asia-Pacific Forum on Translation and Intercultural Studies (University of Hawaii, USA) で、1 章分を執筆した書籍 *Translating Women* (Routledge, 2017) の編者 Prof. Luise von Flotow とともにパネルを組み、フェミニスト翻訳の日本の事情について「De-Feminizing Translation: A Form of Feminist Translation in the Japanese Context」と題した発表を行った。

加えて、東北学院大学主催の公開講義にて高校生や一般人向けに翻訳学とその主要な研究のうちいくつかを紹介し、翻訳学の普及に努めた。この公開講義内容はその後、論文「翻訳学への招待」にまとめて『東北学院大学論集 英語英文学』(第 101 号, pp. 121-126, 査読無) で発表した。

2017 (平成 29) 年度

この年度の前半には、現代小説の翻訳テキストと非翻訳テキストの文末詞使用の分析を女性登場人物に焦点を当てて行った。この分析では、まずは現代小説 30 数冊程度の女性登場人物の会話文について定性分析を行った。その後、『あまからカルテット』(柚木麻子著、2015)、『ランチのあこちゃん』(柚木麻子著、2015)、『ハリー・ウィンストンを探して』(L.ワイズバーガー著、佐竹史子訳、2009)、『ブリジット・ジョーンズの日記』(H.フィールディング著、亀井よし子訳、1998) の 4 冊に絞り、女性主人公の会話文に使用される文末詞を定量分析した。

発行年と登場人物の年齢が近い『あまからカルテット』(非翻訳テキスト)と『ハリー・ウィンストンを探して』(翻訳テキスト)の複数の登場人物の会話文を定量分析した結果、翻訳テキストの方が、非翻訳テキストの女性登場人物よりも女性文末詞の使用率が高いことが分かった。これは、前年度の児童文学を対象とした研究結果と同じであった。加えて、登場人物の性格づけによって女性文末詞の使用率にばらつきがあることも分かった。現実の女性の発話と比較すると、非翻訳テキストの女性登場人物の文末詞使用は、現実の女性の発話に近い結果となった。

読者受容を探るためのアンケートでは、『あまからカルテット』と『ハリー・ウィンストンを探して』の会話文の一部を大学生 128 名に読んでもらい、「どちらが翻訳テキストだと思うか?」「その理由は?」「翻訳テキストだと思ったほうのテキストの特徴は?」などといった質問に答えてもらった。その結果、アンケート回答者の 8 割以上が翻訳テキストと非翻訳テキストを正確に区別できることが分かった。また、翻訳テキストの文体的特徴として語句の選択、文の構造などが挙げられたが、特に女性文末詞の多用についての指摘も多くみられた。ここから、読者は翻訳テキストに女ことばが過剰に使われることを翻訳文体として受け入れていることが示されたといえる。

これらの研究成果は、国内学会・日本通訳翻訳学会第 18 回会年次大会(愛知大学)で、「女性向けの翻訳・非翻訳テキストの文体比較」と題して口頭発表された。その後、論文「翻訳・非翻訳小説における女ことば: 文末詞使用と読者受容」が国内学術誌『通訳翻訳研究』(第 17 号, pp. 93-111, 査読有) で発表された。

この年度の後半には、現役翻訳者 2 名にインタビューを行った。このインタビューは、英語で

書かれた短編小説 *Folie a Deux* (R. ブラウン著、1993) を訳した 2 名の翻訳者が、どのような規範意識を持っていたのか、その規範意識はどこからきているのか、その規範意識が翻訳テキストの文体にどのように現れているのか、2 つの翻訳テキストの文体の特徴はどのようなものなのか、などについて、登場人物の言葉づかいの観点から探ろうとしたものである。

2018 (平成 30) 年度

この年度には、前年度に行ったインタビュー取材のデータを文字に起こし、翻訳者の発言内容の検証と考察を行った。短編小説 *Folie a Deux* を分析テキストとして選んだ理由は、主人公とそのパートナーの性別が最後まで明かされないからであり、かつ 2 本の翻訳テキストが 1999 年と 2002 年と比較的近い時期に出版されているからである。

これらの翻訳テキストの主人公とそのパートナーの文末詞使用を定量分析して比較すると、一方の翻訳テキストでは主人公が女性、パートナーが男性に近い言葉づかいをするのに対し、もう一方の翻訳テキストでは主人公もパートナーも中性的な言葉づかいをしている。しかし、インタビューからは、言葉づかいの性差が大きいほうのテキストも、自覚的に性差が明確な言葉を選んで訳されたわけではないということが示された。ここから、翻訳者の持つ規範が無意識のうちに翻訳の際の言葉の選び方に影響を与えている可能性が考えられる。同時に、性差の表れやすい日本語では女らしさや男らしさを排除して中性的な言葉づかいをすることが難しいということも明らかになった。

このインタビューによる成果は、国際学会 PALA (Poetics and Linguistics Association) Annual Conference (University of Birmingham, UK) で「Translating Neuter Characters into Japanese: How Translators Read and Translated」と題して口頭発表された。

また、共編書 *Palgrave Handbook of Literary Translation* を Palgrave Macmillan から出版することができた。この書籍は、文学翻訳研究について英語圏で出版された初めてのハンドブックである。主な特徴は以下の 4 つである。(1) 文学翻訳に関する初のハンドブックであること、(2) 文学翻訳研究で広く使われているにも関わらず理論的枠組みが提示されることがほとんどなかった事例研究に焦点を当てたこと、(3) 翻訳研究の中心である欧米のみならず、アフリカ、アジア、中南米など世界中の事例を集めたこと(4) 言語に関しても、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、カタルーニャ語、オランダ語、ヘブライ語、ナイジェリア英語、日本語、中国語、ロシア語、トルコ語ほかの様々な言語で書かれたり訳されたりしたテキストに関する研究を集めたことである。26 名の執筆者が、3 つのテーマ(「Literary translation and style 文学翻訳と文体」「The author-translator-reader relationship 作者 翻訳者 - 読者間の関係」「Literary translation and identity 文学翻訳とアイデンティティ」)に沿って新たに書き下ろした論文を集めたものであり、翻訳学の研究分野に貢献することができたと考えている。

このハンドブックでは 2 人のイギリス在住の研究者と編集に携わったほか、単著論文「De-feminized Woman in Conan Doyle's *The Yellow Face*」(pp. 107-123) と、共著論文「Introduction」(pp. 1-18) と「Conclusion」(pp. 535-541) の執筆も担当した。「De-feminized Woman in Conan Doyle's *The Yellow Face*」では、女ことばの使用に自覚的な翻訳者が、女ことばをなるべく使わずにある小説を日本語に訳したにも関わらず、その編集過程で女ことばを加えられて出版された事例について紹介した。「Introduction」では、文学研究における事例研究の重要性とその方法論などについて理論的枠組みを使って説明した。

さらにこの年度には、翻訳テキストの女性登場人物のセクシャリティと言葉づかいとの関連性についての定量・定性分析の結果をまとめた論文「Connie's Language and Sexuality: Lady Chatterley's Lover in Japanese」が国際学術誌 *Perspectives: Studies in Translation Theory and Practice* (Vol. 26, No. 3, pp. 377-390, 査読有) で発表された。この論文では、女性登場人物の男性登場人物に対しての発話では、その男性と性的関係を持った後に女性文末詞の使用率が上がる、つまり登場人物のセクシャリティとの関連性があることを論じている。

2019 (平成 31 / 令和 1) 年度

この年度は、フェミニスト作家による小説の翻訳テキストは読者にどう読まれるのかを探るために、受容研究を行った。研究対象としたテキストは、男女の力関係が逆転した社会を描くディストピア小説『パワー』(N. オルダーマン著、安原和見訳、2018) である。

この社会では、現実世界で女性が受けることの多い差別や制限を男性が受けるが、その一例と

して小説中に女性グループが男性をレイプするシーンがある。そのシーンの一部を大学生 147 名に読んでもらい、その後にアンケート形式で読者受容を調べた。その結果、女性が男性をレイプするシーンのほうが、性別が逆である場合よりも残酷であると感じることが示された。また、残酷な描写を読む際に、そのテキストが翻訳されたものであると意識するほうが心理的距離を置いて読まれる可能性があることが分かった。

これらの結果がどのような背景から生まれたのかを知るために、日本におけるジェンダー・イデオロギー、フェミニズムの受容、女性の身体に関するイデオロギー、女性に対する差別などについて、理論的背景と社会・文化・政治・経済的な側面からの要因を知る必要があると考えた。そのため、文献研究を集中して行った。

具体的には、フェミニズム理論、性役割、母性、セクシュアリティ、メディアと性描写、教育とジェンダー、日本とアジア、西洋の女性史とジェンダー史、フェミニズム文学批評、男性学、性暴力、性的マイノリティ、身体論、哲学などについてのジェンダー関連の文献研究、性被害や性差別の当事者による言説などについての研究、さらには、フェミニスト作家による様々なジャンルの文学作品（小説・劇・詩・映画・漫画など）や女性の問題を題材とした多方面のジャンルにわたる文学作品の分析などを行った。これらの文献研究の成果は、今後のジェンダーと翻訳に関する研究に活かせるものとする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Furukawa, Hiroko	4. 巻 Vol. 26, No. 3
2. 論文標題 Connie's Language and Sexuality: Lady Chatterley's Lover in Japanese.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Perspectives: Studies in Translation Theory and Practice	6. 最初と最後の頁 377-390
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/0907676X.2017.1368677	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古川弘子	4. 巻 第17号
2. 論文標題 翻訳・非翻訳小説における女ことば：文末詞使用と読者受容	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 通訳翻訳研究	6. 最初と最後の頁 93-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN 1346-8715	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Furukawa, Hiroko	4. 巻 Vol. 17
2. 論文標題 Kiki's and Hermione's Femininity: Non-translations and Translations of Children's Literature in Japan.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Invitation to Interpreting and Translation Studies	6. 最初と最後の頁 20-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN 2185-5307	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古川弘子	4. 巻 101
2. 論文標題 翻訳学への招待	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東北学院大学論集 英語英文学	6. 最初と最後の頁 121-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN 0385-406X.	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Hiroko Furukawa
2. 発表標題 Translating Neuter Characters into Japanese: How Translators Read and Translated
3. 学会等名 PALA (Poetics and Linguistics Association) Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 古川弘子
2. 発表標題 女性向けの翻訳・非翻訳テキストの文体比較
3. 学会等名 日本通訳翻訳学会第18回会年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hiroko Furukawa
2. 発表標題 Translational and Non-translational Style in Japanese Children's Literature
3. 学会等名 PALA (Poetics and Linguistics Association) Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 古川弘子
2. 発表標題 キキとハーマイオニーの女ことば 翻訳と非翻訳の児童文学における文体比較
3. 学会等名 日本通訳翻訳学会第17回会年次大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Hiroko Furukawa
2. 発表標題 De-Feminizing Translation: A Form of Feminist Translation in the Japanese Context
3. 学会等名 The Fifth Asia-Pacific Forum on Translation and Intercultural Studies (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 古川弘子
2. 発表標題 翻訳学への招待
3. 学会等名 東北学院大学文学部英文学科公開講義
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Jean Boase-Beier, Lina Fisher and Hiroko Furukawa (eds.)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 551
3. 書名 The Palgrave Handbook of Literary Translation	

〔産業財産権〕

〔その他〕

〔図書 - 章執筆〕 (計3件) Furukawa, Hiroko. 'A De-feminized Woman in Conan Doyle's The Yellow Face'. In The Palgrave Handbook of Literary Translation. New York: Palgrave Macmillan. 107-123. 2018. (単著). Furukawa, Hiroko, et.al. Introduction. In The Palgrave Handbook of Literary Translation. New York: Palgrave Macmillan. 1-18. 2018. (国際共著). Furukawa, Hiroko, et.al. Conclusion. In The Palgrave Handbook of Literary Translation. New York: Palgrave Macmillan. 535-541. 2018. (国際共著).
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----